

人生100年時代の健康長寿を支援するコミュニティ課題 ——高齢者の近隣との交流実態における都市部（京都市下京区） と農村部（京丹後市）との比較を通じて——

富澤 公子ⁱ，中西 典子ⁱⁱ

本研究は人生100年時代が迫るなか、サクセスフルエイジングを実現する可能性について、地域コミュニティという視点から考察したものである。とくに高齢者の近隣との交流実態については、農村部（京丹後市）との比較（富澤，2018）を通じて分析している。本研究からは、下京区の学区自治活動は70～80代の後期高齢者が中心であり、「祭りなど集まる機会」や「昔から知っている人」が多く、「老人クラブの活動」も活発であるという結果が得られた。とりわけ、「重要だと思う健康長寿要因」の1位には「近隣とのつながり」があげられた。京丹後市との比較では、紐帯、伝統と習慣、ソーシャルキャピタル、高齢者評価ともに同程度に高い状況にあった。*t*検定では「高齢者評価」のみ下京区が高いという有意差が見られた。この結果は都市部のコミュニティの希薄化という通説を反省しつつ、自治基盤の強固なコミュニティでは高齢者の活動する場があり、これらが健康長寿の実現に寄与することが推察された。今後の課題として、マンション住民や若い層の参加を促すための簡便な情報提供アプリの開発など、大学や研究機関の資源を得ながら解決に向けた研究が必要である。

キーワード：健康長寿，サクセスフルエイジング，地域コミュニティのつながり，伝統，祭り，老人クラブ

はじめに

長寿・超高齢社会の先進国日本では、近年「人生100年時代¹⁾」へ向けた議論が活発化している²⁾。人生100年時代を提唱した『LIFE SHIFT：100年時代の人生戦略』の著者リンダ・グラットンは、「日本は世界でも指折りの幸せな国で、平均寿命は世界のトップに立って、100歳を超えて生きる人はもっと珍しくなくなる」と評価し、「2007年に日本で生まれた子

どもの半分は、107年以上生きることが予想される」と紹介している（リンダ・グラットンら，2016 p.1）。日本における平均寿命の伸び、健康寿命の伸び、社会活動に参加する高齢者の増加を象徴している。

2020年の男性の平均寿命は81.56年、女性の平均寿命は87.71年で、1950年と比べると、男性23.50年、女性26.21年とそれぞれ伸びている。今後も平均寿命は伸び、令和47（2065）年には、男性84.95年、女性91.35年となり、女性は90年を超えると見込まれている（令和4年版高齢社会白書）。

健康寿命は男性72.68年、女性75.38年で、平均寿命の伸びを上回って毎年延伸している。また65歳以上の30.2%が収入を伴う仕事をしており、健康やスポ

i 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

ii 立命館大学産業社会学部教授

ーツ、趣味や地域活動への参加も増えている。社会活動に参加しているの方が生きがいを感じる割合も高い。しかしながら、老人クラブの活動はクラブ数、会員数共に年々減少傾向が続いている(令和4年版高齢社会白書)。

地域を基盤とした高齢者の自主活動として、地域の安全・安心のまちづくりや環境保全活動、高齢者の健康と生きがいに寄与してきた老人クラブの弱体化は、自治会、町内会等の加入率の低下とともに、地域のつながりの先細り減少として危惧されている(石田, 2022)。一方で内閣府では、「人生100年時代構想会議」³⁾を設置し、「高齢者から若者まで、全ての国民に活躍の場があり、全ての人が元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会をつくることが重要」とする(内閣府, 2017)。

しかし現実には、前述のように、平均寿命が延び、元気で働く高齢者が増えている一方で、一人暮らし高齢者の増加や、コロナ禍が長期化する中で人とのつながりを保つことが難しくなっている。特に高齢者層では、地域での役割の喪失や他者との接触の機会のない「社会的孤立」が大きな課題となっている(みずほリサーチ&テクノロジーズ, 2021)。

地域との交流のない一人暮らし高齢者の増加は、孤独死・孤立死の多発化につながり、加えて、詐欺などの深刻な高齢者被害の増加も、孤立が関係していると指摘されている(平成23年版高齢社会白書)。一方で、高齢者犯罪も増加しているなかで、犯罪を繰り返す高齢者には孤立化傾向があることが指摘されている(平成30年版犯罪白書)。高齢者にとって、孤立・孤独による社会的役割や生きがいなどの喪失は、加齢に伴う生理的機能の衰え以上に、認知症や鬱の誘因要因となる(権藤, 2008)。近年では、孤立・孤独問題の予防策として、地域コミュニティの役割が注目されてきた(総務省, 2022)。

コミュニティにおける希薄化が危惧される中で、健康長寿者の多い長寿地域(奄美群島や京丹後市)では、集落を基盤とする濃密なコミュニティ実態が明らかにされている(富澤, 2018; 2019)。これら地

域の共通点として、昔からの祭りや伝統行事、結の習慣が継承されていることがあげられる。昔なじみの関係性の中で、結や助け合い、絆などが強固に継承され、自然豊かな環境のなかで、高齢者は生涯現役で農作業に従事している。また、伝統行事や祭りの催行では、行事を先導する教師的役割があり、超高齢期においても、経験や技、ノウハウなどの潜在能力を活かした活躍の場がある。地域の伝統やコミュニティのつながりのなかで、健康長寿で幸福な老いを実現している実態があった。そのような高齢者に対する若い世代の敬老意識は高く、高齢者にとっても長生きをポジティブにとらえる要因になっていた。

長寿地域の研究からは、地域での人と人のつながりは高齢者がこれまでの経験を生かす場となり、学びあい育ちあう場となり、次世代に地域の伝統文化が引き継がれていく。これらは、健康長寿やサクセスフルエイジングを実現する上で重要な要因であることが示唆されている(富澤, 2021; 2022)。しかし、これまでの調査では、都市部における地域コミュニティと健康長寿の関連要因については残された課題が多い。

本稿では、京都市の中心部である下京区の学区を対象に、都市部での健康長寿とコミュニティの関わりに焦点を当てる。なお、これまで、京都市を対象としたコミュニティ調査としては、下京区Y学区を事例とした調査(湯浅俊郎, 2004)、中京区2学区の近所付き合いと住民自治(石盛真徳, 2009)、中京区2学区のマンション住民と町内会(田中志敬, 2010)、中京区2学区を対象とした近所付き合いと住民自治(田中志敬, 2016)、下京区有隣地区を対象としたまちづくり(前田昌弘, 2019)などがある。いずれも住民自治組織としての元学区の歴史性や自治意識、定住性の高さなど京都特有の実態と、都市部の課題であるマンション住民を含めたまちづくりをテーマとするもので、健康長寿を支援する課題からのアプローチは見られない。

このため、本調査では学区における紐帯や伝統行

事・年中行事，ソーシャルキャピタル，高齢者評価などから高齢者の近隣との交流実態に焦点を当てる。学区の健康長寿要因の分析に当たっては，同じ京都府内で，長寿地域である京丹後市の調査結果との比較を通じ行う。加えて，都市部に共通するマンション住民や若い層の参加確保，参加しやすい情報提供などについては，都市部にある大学および研究機関の機能や役割に注視し，学区住民との連携による新たなシステム研究の必要性を明らかにする。

第1部 京都市下京区の調査概要

1 調査地域の概要

1.1 京都市域のコミュニティの概要

政令指定都市である京都市は11の行政区に分かれ，人口は1,449,714人，世帯数737,745世帯，1世帯当たり人員1.97人，高齢化率28.4%である（令和4年7月1日現在）。

住民の自治組織は，町内とその運営を担う町内会，そして，町内と行政区の間に（元）「学区」と呼ばれるコミュニティの活動単位がある。この（元）学区は，室町時代の自治組織「町組」や明治時代の小

図表1 京都市内各学区の自治会組織の構成例



出所：京都市内における各学区の自治会組織の構成例資料5
[https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000049/49970/jitikaikousei\(siryou5\).pdf](https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000049/49970/jitikaikousei(siryou5).pdf)

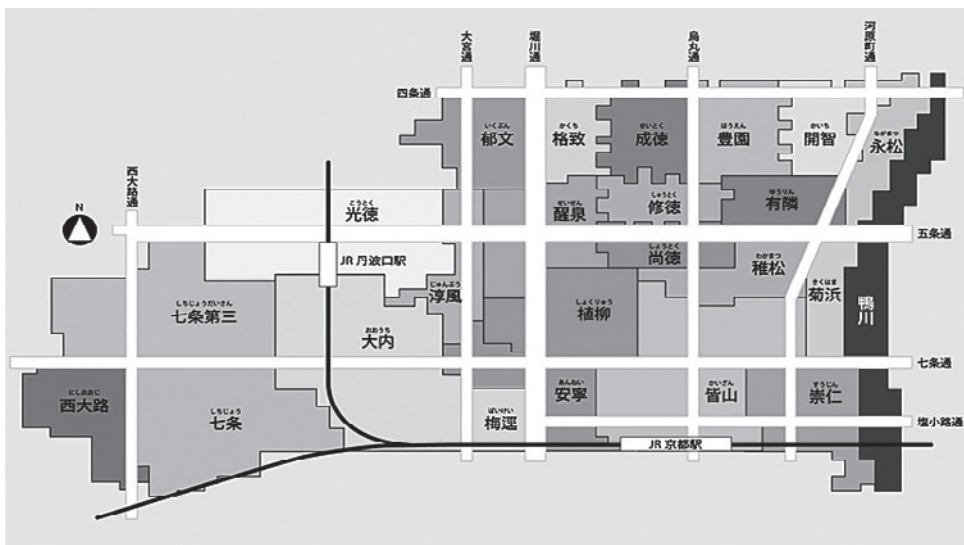
学校「番組小学校」の歴史が受け継がれているもので，学区の地域コミュニティとその運営を担う自治連合会がある。

1.2 下京区のコミュニティの概要

1.2.1 コミュニティ単位の（元）「学区」

下京区には図表2のように，23の学区がある。現在の下京区管内の小学校は統廃合により7校であり，通学区とは一致しない。しかし，多くの地域活動は今もこの元「学区」単位で行われている。各学区の名称は，京都ならではの歴史が刻まれており，学区名の由来においても，かつての平安京の地名や儒教や論語，易経などの故事から引用されたものが多い。学区名は地域の歴史と人々のアイデンティティを示す存

図表2 下京区の学区



出所：下京地域情報サイト：<https://shimogyo.city.kyoto.lg.jp/boards>

在ともいえる⁴⁾。

1.2.2 自然・産業

下京区は、おおむね東西南北を鴨川・西高瀬川・JR東海道本線・四条通に囲まれた平坦な区域で、東端に高瀬川が流れ、西端に西高瀬川の流路がある。また、区域は、主要幹線道路である河原町通・烏丸通・堀川通・五条通や鉄道ターミナル「京都駅」があるなど、京都市の玄関口として、広域的な交通拠点としての役割を担っている。下京区は「京都府下京区」として明治12年3月14日に誕生し、産業は、京扇子・京漆器・京仏具・京人形・京友禅などの伝統産業が数多く立地している。室町筋の繊維卸業の間屋街や四条通の商店街、そして百貨店が集中している。また、「市民の台所」としての京都市中央卸売市場や先端産業の拠点である京都市サードパークがある。

区内には、祇園祭の鉾町(ほこまち)が多くあり、毎年7月になると山鉾が建ち、祇園囃子(ぎおんばやし)が聞こえてくる地域である。また、全国屈指の寺院や多くの研究機関などがあり、「学術・文化のまち」・「文化を生かした観光のまち」として発展している⁵⁾

2 調査方法

2.1 対象者と収集方法・調査時期

本研究の範囲は、図2に示すように下京区管内に位置する23(元)学区コミュニティであり、このコミュニティは、各学区自治連合会長(男性22名・女性1名)のもとに様々な活動を行っている。調査実施にあたっては、下京区役所の区長ならびに地域力推進室に協力依頼を行い、当推進室より学区自治連合会長会議にて了承を得ていただいた。調査対象者は、京丹後市における区長調査の規模(210名)を鑑みて、23学区ごとに10名の計230名とした。各学区分の調査票の配布については、調査の匿名性の観点から、区役所職員が各会長宅を訪問して手渡しで行った。調査対象者の10名の選定においては自治会長に委任し、調査は2022年6月10日から7月20日の期間で実施した。

2.2 質問紙の構成

問1:基本属性、*問2:紐帯項目、*問3:年間行事数、*問4:伝統と習慣、問5:ソーシャルキャピタル、問6:高齢者評価、問7:重要だと思う健康長寿の要因、問8~10は自由記述で構成した⁶⁾。

なお、※は新型コロナ蔓延以前の状況での回答をお願いした。

2.3 倫理的配慮

立命館大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号衣笠一人-2022-5)。

2.4 分析方法

SPSSバージョン28により分析を行った。

3 下京区の調査結果:属性分析の側面

3.1 下京区元学区別人口・世帯数、高齢化率、回答状況等

下京区の23元学区の人口・世帯数・回答率等は図表3のとおりである。なお、23学区は5つの地域包括センターに分かれている。

3.2 基本属性等

回答者の年代、性別、自治会との関わり等については、図表4のとおりである。年代では、70代(44.5%)と80代以降(26.5%)の2つの年代で70%を超え、60代を加えると90%を占める。自治会との関わりでは、現在役員(87.3%)と過去に役員(8.0%)を加えると95%と、回答者のほとんどが自治会役員である。これらの結果からは、学区活動は後期高齢者で支えられていること、女性高齢者も3分の1を占め活動の一翼を担っている実態が明らかにされた。

学区別の回答率は図表3のとおりで、23学区中22学区、157人から回答があり回答率は68.2%であった⁷⁾。

3.3 コミュニティの満足度と地域愛着度

コミュニティの満足度は、「かなり満足」と「比較的満足」を加えると90%と、かなり高い満足度を示している。

地域愛着度は、「高い」と「比較的高い」を加えると94%と、さらに高い状況にある。その理由に、「自

図表3 元学区別人口・世帯数，高齢化率，回答状況等

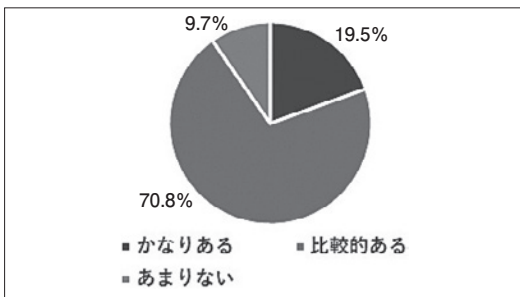
地域包括	学区	世帯数	人口	1世帯当たりの人口	高齢化率	紐帯	満足度	愛着度	行事数	ソーシャルキャピタル	高齢者評価	伝統習慣	回答率%
東部	皆山	1,913	2,788	1.46	20.5	24.63	3.11	3.44	8.00	15.13	13.29	15.33	90
	菊浜	1,144	1,615	1.41	26.7	26.14	2.86	3.43	7.00	13.14	13.14	15.00	70
	崇仁	884	1,314	1.49	40.6	21.83	2.67	3.33	6.00	11.83	11.17	13.83	60
	稚松	1,055	1,792	1.70	25.3	29.00	3.22	3.33	11.00	16.13	15.86	16.75	90
中部	安寧	1,092	1,625	1.49	24.7								10
	格致	2,585	3,976	1.54	20.9	26.00	2.86	3.13	11.00	14.25	13.57	17.00	80
	植柳	1,468	2,430	1.66	29.6	30.63	3.20	3.40	12.00	15.00	13.50	17.50	100
	醒泉	2,799	4,699	1.68	21.4	24.80	3.20	3.20	9.00	14.80	13.60	16.40	40
修徳	梅逕	389	612	1.57	28.6	27.38	2.75	3.50	8.00	14.13	12.13	15.25	80
	開智	1,177	1,815	1.54	26.1	23.50	3.25	3.25	7.00	14.25	14.25	15.50	40
	修徳	1,910	3,048	1.60	18.8	25.50	3.20	3.20	9.00	14.40	13.40	13.33	100
	尚徳	1,265	2,134	1.69	21.0	25.20	3.10	3.50	14.00	14.40	13.78	15.89	100
島原	成徳	1,699	2,681	1.58	18.2	27.40	3.17	3.50	9.00	15.33	12.67	16.20	70
	永松	1,180	1,782	1.51	21.8								0
	豊園	1,651	2,559	1.55	24.2	25.88	3.25	3.63	12.00	15.00	13.83	16.43	80
	有隣	2,613	3,941	1.51	19.1	27.25	3.13	3.63	11.00	14.43	14.71	17.29	80
西部	郁文	2,569	3,844	1.50	22.7	26.00	2.86	3.29	12.00	15.29	14.86	16.71	60
	光徳	3,325	6,442	1.94	26.5	25.40	3.40	3.40	11.00	14.40	13.60	16.40	40
	七条第三	4,476	8,866	1.98	21.4	26.50	3.00	3.38	10.00	16.63	14.71	17.86	80
	淳風	1,788	3,066	1.71	28.7	24.17	3.00	3.33	7.00	13.83	12.83	14.17	60
下京区	大内	1,981	3,766	1.90	28.9	24.17	3.40	3.33	9.00	13.67	13.33	15.00	50
	七条	3,870	7,791	2.01	23.5	24.00	3.17	3.00	6.00	13.00	11.80	12.50	50
	西大路	2,229	3,931	1.76	23.7	25.86	3.25	3.25	9.00	15.14	12.88	15.13	80
総計	45,062	76,517	1.70	23.6	25.96	3.10	3.37	9.27	14.57	13.51	15.77	67	

注：人口・世帯数は国政調査統計区推計人口 令和4年7月1日現在

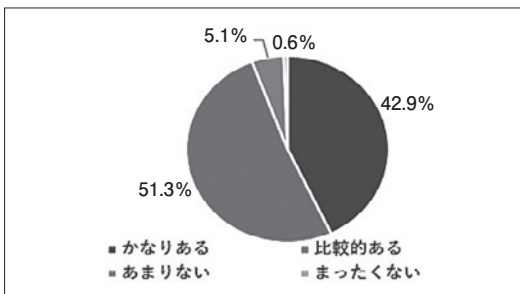
図表4 回答者の属性等

年代	40代 (3.2%)、50代 (3.2%)、60代 (22.6%)、70代 (44.5%)、80代以降 (26.5%)	
性別	男性 (66.5%)、女性 (33.5%)	
自治会とのかかわり	現在役員 (87.3%)、過去に役員 (8%)、役員歴なし (4.7%)	
(参考)下京区人口	76,517人 (学区平均3,326人)	世帯数45,062世帯 (平均1,590世帯)
1世帯当たり人口	1.7人	高齢化率23.6% (令和4年7月現在)
回答率	68.3% (157人 / 230人)	

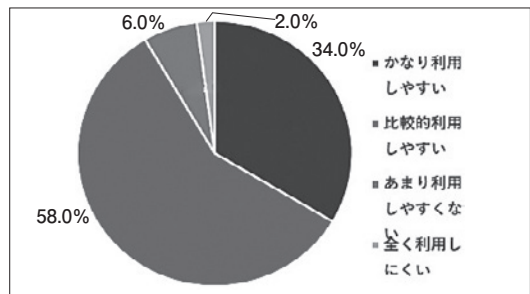
図表5 コミュニティ満足度



図表6 地域愛着度



図表7 サービス利用環境



分が生まれ育ったまち」, 「長年住み慣れたまち」だからと多くの人が回答している。

男女別では、愛着度で女性の得点が少し高いもののその差は少なく、また、男女ともに満足度より愛着度の得点が高い傾向にある。

3.4 医療や福祉サービスの利用環境

医療や福祉サービス利用環境では、利用しやすい(かなり, 比較的)が92%で、都市部という環境条件

から利便性の評価は高い。

なかでも、サービスを利用している層は「かなり利用しやすい」が高くなっている。

4 下京区の学区環境結果

4.1 紐帯の強さ

学区の紐帯項目10項目を、肯定(「かなりある」, 「比較的ある」)の高い順に並べた図である。「祭りなどの集まる機会」, 「助け合いなどの地域のつながり」, 「昔から知っている人が多い」, 「老人クラブなどの活動が活発」が8割を超えている状況にある。

4.2 学区別の紐帯の状況

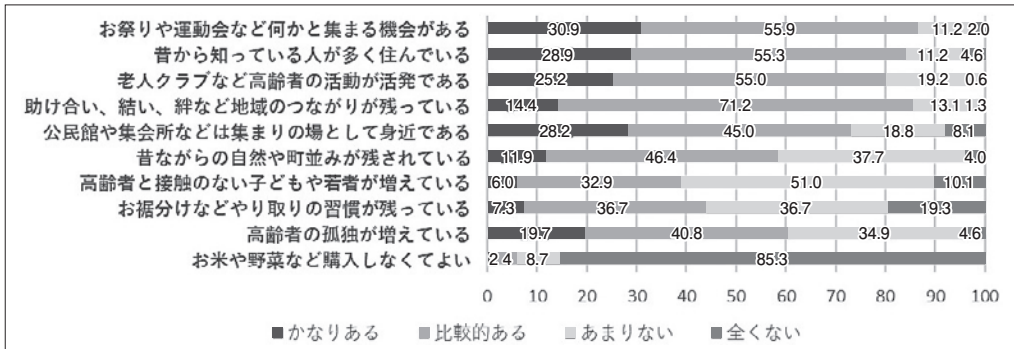
学区別の紐帯の合計得点を箱ひげ図で表したのが

図表9である。平均値は25点で、最頻値は27点である。植柳学区が高い得点を示し、崇仁学区がやや低い得点を示している。しかし、全体として20~30点の間にあり、学区間の大きな差はないことが示された。

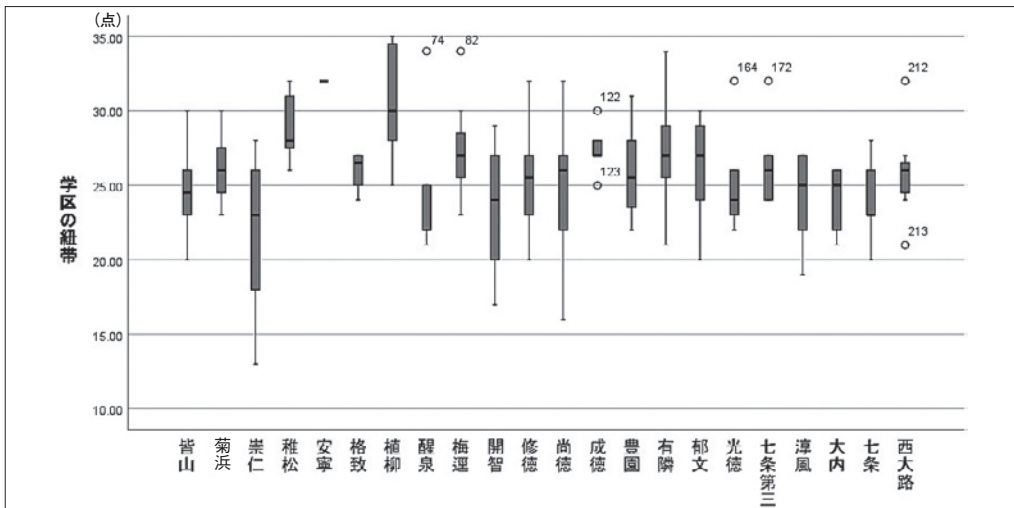
4.3 年間行事について

学区の年間行事は、防火・防災、学区運動会、地藏盆、敬老会、清掃・草刈の6つの行事で、全体の7割を超えている。次いで、学区だよりの発行やスポーツ大会と続いている。行事数は各学区ともに6~14の範囲にあり、共通する年間行事が行われている。学区別の行事の種類数は尚徳学区が14種類と最も高く、植柳学区、豊園学区、郁文学区が12種類と

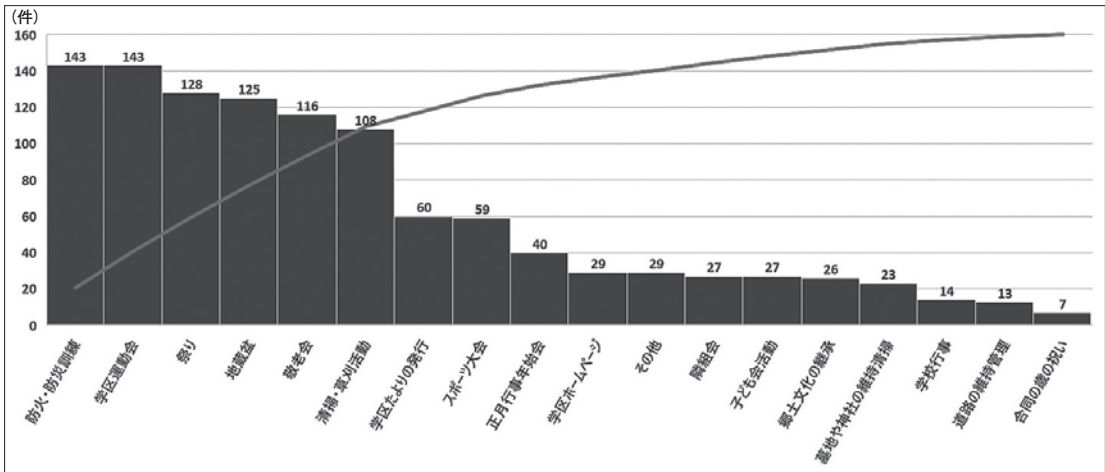
図表8 学区の紐帯状況



図表9 学区の紐帯状況



図表10 年間行事の状況



続いている。全学区で、6種類以上の行事が行われている。

4.4 伝統と習慣の状況

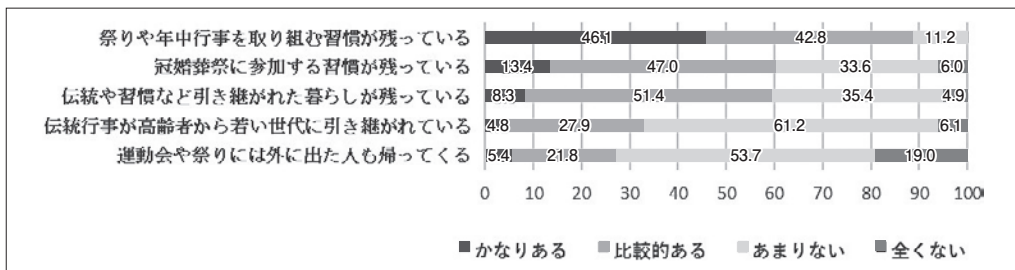
本調査での伝統と習慣は、図表11の5項目である。肯定の高い順にみると、「祭りなどや伝統行事」（かなりあると比較的ある）の回答は、89%と高い状況にある。次いで、「冠婚葬祭と伝統習慣の継承」が60%を占めている。一方、「伝統行事が若い人に引き継

がれている」、「運動会や祭りに外に出た人も帰ってくる」の2つの項目の肯定率は30~40%であり、次世代への引継ぎの肯定率は低い状況が示された。

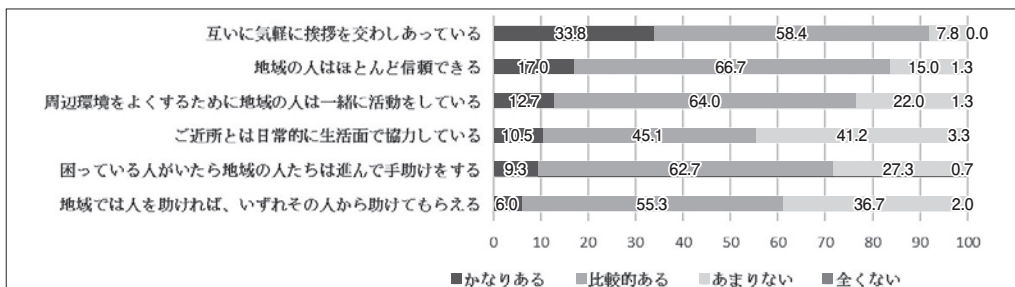
4.5 ソーシャルキャピタルの状況

信頼、互助・互恵、ネットワークをみるソーシャルキャピタルの肯定順では、「互いに挨拶を交わす」は92%と非常に高い。次いで、「地域の人は信頼できる」84%、「周辺環境をよくするために一緒に活動し

図表11 伝統と習慣の状況



図表12 ソーシャルキャピタルの状況



ている」,「困っている人に手助けする」はともに70%を超える状況にある(図表12)。また,年代とともに,ソーシャルキャピタルの得点が高くなる傾向が示された。

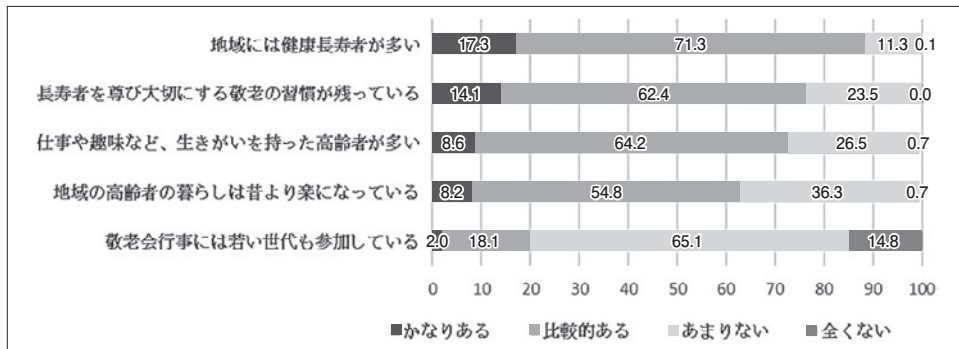
4.6 高齢者評価

高齢者評価は図表13の5項目で,肯定順では,「地域には健康長寿者が多い」は90%に近い。次いで,「長寿者を尊び大切に作る習慣」と「仕事や趣味など,生きがいを持った高齢者が多い」が70%を超えている。「地域の高齢者の暮らしは昔より楽になった」は6割が肯定している。一方,「敬老会行事に若い世代も参加している」は2割程度であった。

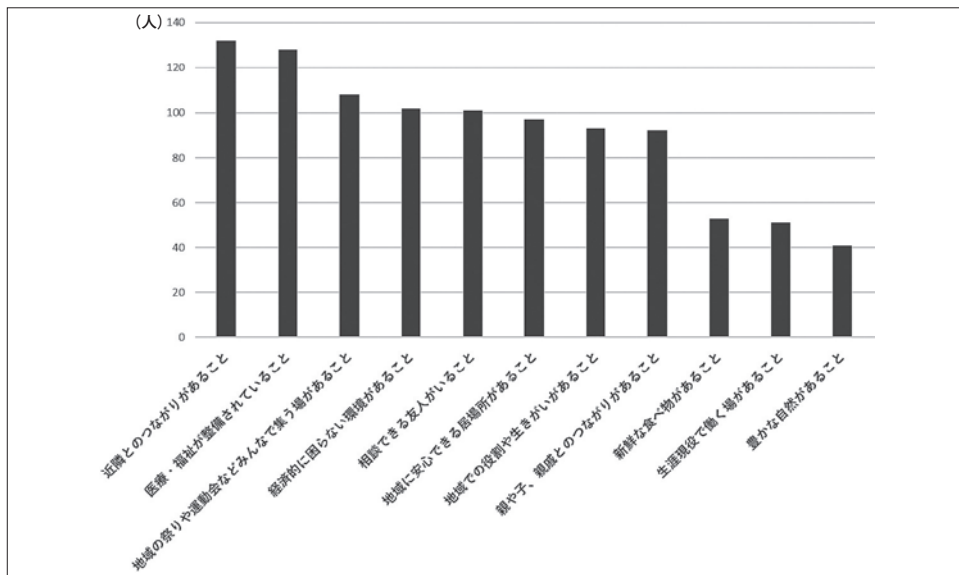
4.7 重要だと思う健康長寿要因

重要だと思う健康長寿要因として14項目を例示して,当てはまるものを複数回答可で求めたところ,1位には,「近隣とのつながりがあること」(132人),2位に「医療・福祉が整備されていること」(128人)で,この2項目は,回答者の80%を超えている。次いで,「地域の祭りや運動会などみんなで集う場があること」,「経済的に困らない環境」,「相談できる友人」,「地域に安心できる居場所」の4項目には約100人が回答し,この6項目で全体の7割を超える状況にある。健康長寿には,人と人のつながりやコミュニティが重要であることを多くの人が回答している。

図表13 高齢者評価の状況



図表14 重要だと思う健康長寿要因



5 項目間の検定・分析

5.1 項目間のカイ二乗検定

項目間での有意な関連についてカイ二乗検定したところ、図表15のような関連が示された。年代の高さとソーシャルキャピタルの得点は有意に関連すること、紐帯の強さと伝統と習慣、ソーシャルキャピタル、高齢者評価の高さは有意に関連すること、満足度の高さと伝統と習慣、愛着度の高さは有意に関連すること、回答率の高さは女性と、行事数の高さと有意に関連することである。

図表15 項目間の有意な関連

年代	ソーシャルキャピタル ($p < 0.01$) の高さ
紐帯	伝統と習慣 ($p < 0.01$)、ソーシャル ($p < 0.01$)、高齢者評価 ($p < 0.05$) の高さ
満足度	伝統と習慣 ($p < 0.01$) と愛着度 ($p < 0.01$) の高さ
回答率	性別 (女性) : ($p < 0.01$) と行事数の高さ ($p < 0.01$)

5.2 学区の紐帯の因子分析

5.2.1 探索的因子分析

紐帯の潜在因子を見つけるために、10項目で探索的因子分析（主成分法，プロマックス回転）を行ったところ、「お米や野菜は購入しなくてよい」の共通性が1以下と低かったため除外し、9項目で因子分析に適するかを検定を行った。結果、標本妥当性は0.7を超え標本として望ましい数値と判断された（図表16）。

図表16 KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定		0.709
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗	274.029
	自由度	36
	有意確率	0.001

5.2.2 因子の命名

9項目で探索的因子分析をしたところ、3つの因

子が導かれた。第1因子は、「お祭りや運動会など何かと集まる機会がある」、「老人クラブなど高齢者の活動が活発である」、「公民館や集会所などは集まりの場として身近である」の3項目で構成されており、活動に高い負荷量が示されていることから、「活動性」因子と命名した。

第2因子は、「昔から知っている人が多く住んでいる」、「昔ながらの自然や町並みが残されている」、「お裾分けなどやり取りの習慣が残っている」、「助け合い、結い、絆など地域のつながりが残っている」の4項目で構成され、人々や地域での親密なつながりに高い負荷量を示していることから、「親密性」因子と命名した。

第3因子は、「高齢者の孤独が増えている」「高齢者と接触のない子どもや若者が増えている」の2項目から構成され、人との疎遠な関係に負荷量が高いことから、「疎遠」因子と命名した。

5.3 尺度

5.3.1 尺度の信頼性

尺度の信頼性として、 α 係数を算出したところ、「活動性」因子は $\alpha = 0.71$ 、「親密性」因子は $\alpha = 0.67$ 、「疎遠」因子は $\alpha = 0.61$ であった。いずれも0.6は上回っており、 α 係数が高くないのは項目数が少ないことに起因すると推測されることから、尺度として容認できる範囲と判断した。なお、3つの因子の説明力は62.5%である。

図表18 尺度の信頼性

因子名	因子 (項目)	Cronbach の α 係	累積説明力 %	統計量
活動性	第1因子 (3)	0.710	32.314	146
親密性	第2因子 (4)	0.667	48.952	149
疎遠	第3因子 (2)	0.608	62.498	148

図表17 紐帯に関する因子分析

項目	F1	F2	F3	M	SD
お祭りや運動会など何かと集まる機会がある	0.840	-0.010	0.090	3.16	0.692
老人クラブなど高齢者の活動が活発である	0.830	-0.104	-0.165	3.05	0.686
公民館や集会所などは集まりの場として身近である	0.769	0.013	0.065	2.93	0.890
昔から知っている人が多く住んでいる	-0.176	0.868	-0.014	3.09	0.763
昔ながらの自然や町並みが残されている	-0.059	0.752	0.094	2.66	0.738
お裾分けなどやり取りの習慣が残っている	0.142	0.611	-0.319	2.32	0.869
助け合い、結い、絆など地域のつながりが残っている	0.260	0.513	0.207	2.99	0.573
高齢者の孤独が増えている	-0.089	-0.074	0.850	2.24	0.822
高齢者と接触のない子どもや若者が増えている	0.088	0.062	0.812	2.35	0.744

注) 因子抽出法：主成分分析 (回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法回転) で行い4回の反復で回転が収束した。

5.3.2 下位尺度の相関とt検定

これら3つの下位尺度間の相関は次のようである。「活動性」は、「親密性」と強い相関があり、「疎遠」とも弱い相関関係を示している。「親密性」は「疎遠」と弱い相関を示している。しかし、「親密性」は「疎遠」との相関は示されなかった(図表19)。

5.3.3 重回帰分析

3つの下位尺度(「活動性」「親密性」「疎遠」)を従属変数として、「伝統と習慣の継承」「ソーシャルキャピタル」「高齢者評価」の3つの独立変数を使用し重回帰分析を行った。

この結果は、「活動性」「親密性」ともに、「伝統と習慣の継承」と「ソーシャルキャピタル」に有意な関連を示し、「疎遠」は「ソーシャルキャピタル」のみ有意な関連が示された。

このことから、「活動性」と「親密性」は、活動や

集まりの場を通じ「伝統と習慣」や「ソーシャルキャピタル」を高め、反対に、「疎遠」は「ソーシャルキャピタル」の低さと関連することが示された。

5.4 各項目間の相関関係

「学区の紐帯」を中心に各項目間の相関関係を見ると、「伝統と習慣」と「ソーシャルキャピタル」、「高齢者評価」にかなり強い相関が示され、「満足度」や「愛着度」もやや相関が示された。なお、「伝統と習慣」は「ソーシャルキャピタル」、「高齢者評価」にかなり強い相関が示され、「ソーシャルキャピタル」は高齢者評価にかなり強い相関が示された。

6 自由記述の分析

自由記述欄にはほとんどの人がコメントを寄せてくれた。コミュニティへの熱い思いが伝わってくる内容であった。その内容について、コミュニティ満

図表19 下位尺度の相関とt検定

項目	第1因子	第2因子	第3因子	平均値	標準偏差
お祭りや運動会など何かと集まる機会がある	0.84	-0.01	0.09	3.16	0.69
老人クラブなど高齢者の活動が活発である	0.83	-0.10	-0.16	3.05	0.69
公民館や集会所などは集まりの場として身近である	0.77	0.01	0.06	2.93	0.89
昔から知っている人が多く住んでいる	-0.18	0.87	-0.01	3.09	0.76
昔ながらの自然や町並みが残されている	-0.06	0.75	0.09	2.66	0.74
お裾分けなどやり取りの習慣が残っている	0.14	0.61	-0.32	2.32	0.87
助け合い、結い、絆など地域のつながりが残っている	0.26	0.51	0.20	2.99	0.57
高齢者の孤独が増えている	-0.09	-0.07	0.85	2.24	0.82
高齢者と接触のない子どもや若者が増えている	0.09	0.06	0.81	2.34	0.74
因子名	活動性	親密性	疎遠		
因子相関行列					
	1	—	0.41**	0.19*	
	2		—	0.12	
	3			—	
因子抽出法:主成分分析					
回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法					
a4回の反復で回転が収束しました。					

図表20 3因子の重回帰分析

因子名	活動性				親密性				疎遠			
	B	標準誤差	t値	有意確率	B	標準誤差	t値	有意確率	B	標準誤差	t値	有意確率
伝統と習慣の継承	0.113	0.032	3.571	<0.001**	0.124	0.031	4.065	<0.001**	0.058	0.037	1.543	0.125
ソーシャルキャピタル	0.092	0.047	1.968	<0.051*	0.156	0.045	3.498	<0.001**	0.112	0.055	2.042	<0.043*
高齢者評価	0.072	0.049	1.469	0.144	0.012	0.047	0.258	0.797	-0.1	0.058	-1.65	0.103

図表21 相関関係

	学区紐帯	満足度	愛着度	伝統と習慣	ソーシャルキャピタル	高齢者評価
学区の紐帯	1	.319**	.364**	.611**	.535**	.447**
満足度		1	.390**	.315**	.319**	.264**
愛着度			1	.357**	.361**	.224**
伝統と習慣				1	.560**	.535**
ソーシャルキャピタル					1	.632**
高齢者評価						1
N	132	141	143	135	142	144

満足度、地域愛着度、学区高齢者の活動、学区の地域課題と課題解決への提案の区分でまとめた結果は、以下のとおりである。

6.1 コミュニティ満足度

満足度の理由	理由の詳細
①学区内の活動が活発	ふれあいの機会が多い、食事会など交流が密、老人から幼稚園児まで集まる。
②顔の見える環境	顔見知りで名前と住所がわかる。学区民が役割分担し地域貢献している。
③話し合える環境	意見を出しあえ耳を傾ける人が多い。フランクに話せ、活動に参加しやすい。
④長老がまとめ役	自治連合会長90代、老人クラブ会長90代など、リーダー的存在の長老はメンバーとも良い関係で、困ったときの支援体制がある。
⑤満足度が低い	活動が同じメンバーである。マンション住民とのコミュニケーションができない。住民の高齢化。

コミュニティ満足度の高さの理由には、日ごろの交流の豊かさが満足度につながっていることが伺え、満足度の低さの要因にはコミュニケーション不足が伺える。

6.2 地域愛着度

愛着度の理由	理由の詳細
①生まれ育ったところ	生まれも育ちも地元。顔見知りが多い。80代になっても幼馴染みがいる。
②住みやすいところ	駅に近く、買物、病院、多方面に便利。住民が穏やか。落ち着いた地域。
③歴史・自然がある	東西本願寺がある。神社、仏閣、公園が多く、歴史が感じられる地域。
④静かで清潔な環境に満足	心ある人が掃除する習慣が引き継がれ町が美しい。人の出入りが少ない。
⑤住んでよかったと思える	お互いに助け合う習慣がある。近所づきあいが良い。住んでいて楽しい。
⑥満足度が低い	単身者用マンションが多い。投資目的のマンション購入で住んでない。交流が少ない。

地域愛着度の高さの理由には、生まれ育った所で利便性が良く、文化や歴史、清潔な地域環境などが愛着度を高める要因となっている。反面、満足度の低さには都市化による交流の希薄化などの要因が伺える。

6.3 学区高齢者の活動

活動の事例	内容
老人クラブの活動が盛んで多様	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの学区でラジオ体操、歩こう会、グランドゴルフ、卓球、バレーボール、健康マージャン、カラオケなど、活発な活動がされている。 定期的なほっこり教室というエキササイズ、おしゃべりサロン、フラワーアレンジメントも開催している。 下京全体では、下京歩こう会、下京歩歩塾、下京男塾、見守り隊がある。 文化活動として、書道、囲碁、将棋教室がある。
90代が活躍	<ul style="list-style-type: none"> 自治連合会の会長90歳、長寿会会長90歳など、90代が活躍。学区内の活動を率先して動いて、学区をまとめている。 90歳前後の方がグランドゴルフ、ラジオ体操、歩こう会などに元気に参加。健康人生の見本である(80代)。
運動や活動への参加が交流の場	<ul style="list-style-type: none"> 健康意識が高くそのための運動が盛んで、同時に地域のコミュニケーションの場になっている。
創意工夫による老人クラブの名前	<ul style="list-style-type: none"> 老人クラブの名称は各学区で工夫され、光徳学区＝光寿会、菊浜学区＝菊浜菊寿会、郁文学区＝郁老会、梅選学区＝梅寿会、有隣学区＝年寿クラブ、開智学区＝友の会(60歳以上が対象で200～250人規模で親ばくやハイキングを実施している)。

下京区全体が、それぞれの学区老人クラブ単位に活動が活発で、多様な内容で行われている状況にある。90代の超高齢者の活躍は後に続く世代の見本とされ、健康長寿への活動につながっている。老人クラブの名前も、老の字が避けられ、それぞれに愛着ある名前が付けられている状況が伺える。

6.4 学区の地域課題と課題解決への提案

地域の課題	内容
都市化による地域のマイナス要因	<ul style="list-style-type: none"> マンション化が昔の地域活動にマイナスに働いている。 土地の買い占め、単身・世帯用マンションの増加、ホテル・宿泊施設の増加。 観光地化による景観の変化、観光地化による転出者の続出。 コミュニティの希薄化。 地価高騰による若い世代の住みにくさ。 マンション、駐車場、飲食店、宿泊施設が増えて街並みが崩れてきている。
マンション住民の自治会への未加入	<ul style="list-style-type: none"> 災害が起こったときの住民実態がつかめない。 マンション住民とのコミュニケーション不足、会話がでない。 要望→ワンルームに入る人と近隣の間でお互いが知れるシステムが必要。
高齢化による課題	<ul style="list-style-type: none"> 役員の高齢化、独居高齢者の増加、若い人の活動への不参加、つながりの希薄化。 市からの地域要望が多いことによる負担増。 世話役になる人が少なく、地域の担い手が不足している。 定年退職した男性の居場所がない。 要望→子どもとお年寄りが集まってなごめる機会があれば。

少子化による課題	<ul style="list-style-type: none"> ・若い世代のカップルが少ないので、子どもが少ない。 ・小学校の統合で子どもたちが遠くの小学校に行き、子どもとのふれあいができにくくなった。 ・若い世代が住めなくなって、子どもが減少している。 ・要望→若い人が住み続けられるまちづくりを。
買い物・スーパーがない	<ul style="list-style-type: none"> ・近くにスーパーがない。80代の足では近くで買えないのは大変。

課題解決への提案
<p>1. 交流・イベントへ参加促進する情報提供システムの構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧住民とマンション住民の交流できるイベントの工夫や情報の周知システムが必要。 ・70代以下の人にはスマホを使いこなす生活が普通になっているので、伝統行事や祭りの継承行事の参加やつながりを維持してうえで、住民あてにプッシュ型で安心でき、簡単操作のアプリ開発支援が求められている（その声は多世代を通して多い）。 ・健康活動や友愛活動、奉仕活動情報の共有化システム。祭りの継承でつながりを維持するうえで、操作の簡単なアプリの開発の必要（多世代が望んでいる）。 ・隣組との連絡方法でお互いに気兼ねなく取れる方法。 ・老人クラブの健康活動（ウォーキング、健康診断）、友愛活動（安否確認、居場所づくり、情報の伝達）、奉仕（公共施設の清掃、花づくり、美化、高齢者支援）が地域でできる情報システムができれば、今は道半ば。 <p>2. 集まりの場所の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雨が降っても集まって世代交流できる場所の確保。そのなかで高齢者の知恵が継承できる。 ・閉校の学舎を活用して地域課題を少しでも解決するべき努力が必要。 ・認知症になる期間を遅らすために、みんなが自分の足で通い、語らい、心を癒せるような憩いの場が必要。 ・横のつながりには、さまざまな出会いの場があることが重要。 <p>3. 地域で住み続けられる高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護施設が家族と連携すれば、100歳以上の人の看取りが家でできる。 ・100歳の母を自宅で看取った経験から、見守る体制の医療と家族への福祉があれば看取れる。その方が心の気持ちは晴れやかに思う。 ・一人暮らし高齢者とその家族が地域で一体になれるシステムや、寂しさを周囲が補うシステム。 ・老人にできる役割を。居場所と役割=生きがいがあること。 <p>4. 若い人の移住やつながる支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移住を促進し、若いファミリー層が移住されると地域活動が活発化する。移住者に寛大で、交流の場をつくる。 ・若い人と一緒に地域活動できる空き家を数家で住み、地域活動にも参加できるシステムづくり ・若い人との交流によって、頼みごとができたり逆に相談に乗れたりできる。個人情報も大事だがどこにどんな人が住んでいるかも重要。 ・若い人とつながるには、声かけが必要。声かけて、新しい住人や民宿の管理人も参加している。 <p>5. コミュニティでのコーディネーターを育てるシステム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔が見える関係、買い物や相談ができる店、趣味や、考え方など、気が合う人とのコミュニティづくり。 ・年齢に関係なくフラットな場で、これらを企画・マッチングしてくれるコーディネーターやそれを育てるシステムが必要。 ・旧学区を超えた区全体の連携が必要。

以上の自由記述の回答からは、数値で示された満足度や愛着度の高さの要因やコミュニティの活発さの要因が明らかになり、数値分析に生かすことができた。さらには、都市部に共通する、マンション居

住者や若い世代の無関心、あるいは不参加の状況、土地の高騰による若い世代の住みにくさ、観光地化による景観の変化や転出者の増加など、様々な課題も見えてきた。また、それに対する解決への提案も積極的に寄せられた。

第2部 京丹後市との比較から見る

下京区のコミュニティ特性

下京区の調査結果について、2017年に同じ調査項目で行った京丹後市の結果（富澤，2018）から比較し、コミュニティ特性を明らかにしていくことにする。なお、京丹後市は百寿者率（人口10万人当たりの100歳以上の割合）が237.33人（全国72.13人：2022年）と全国平均の3倍以上の長寿地域である。

1 京丹後市の調査の枠組み・分析方法

まず、京丹後市の調査から明らかになったコミュニティ特性を紹介する。図表22は、京丹後市（旧6町）の全集落（210）の区長を対象に郵送によるアンケート調査を実施した結果である（倫理的配慮：衣笠一人—2017-1）。調査項目は、集落内の環境と紐帯の状況、伝統と習慣の継承、行事数、高齢者評価、ソーシャルキャピタル、地域の長寿要因など、下京区とほぼ同じ項目である。調査期間は2017年5月27日～6月末で、回答率は60.5%であった。回答した区長の年代は60代が中心（61.8%）で、すべて男性であった。データはSPSSバージョン26により分析した。

2 下京区と京丹後市の比較：各項目平均値のt検定

2.1 紐帯項目について

紐帯に関する10項目の平均値の比較では、京丹後市は「昔から知っている人」、「集会所は集まりの場として身近」、「昔ながらの自然」、「やり取りの習慣」、「お米や野菜は買わなくてもよい」において、下京区より高い。一方、下京区は、「祭りや運動会で集まる機会」や「高齢者の活動が活発」、「助け合い、つな

図表22 京丹後市旧町の集落数・高齢化率，回答状況など

旧町名	人口	世帯数	高齢者数	高齢化率	高齢者一人世帯	農家率	集落数	回答数	回答率
峰山町	12,387	5,127	3,988	32.20	17.80	13.91	37	25	67.60
大宮町	10,346	4,228	3,005	29.05	16.40	14.02	16	10	62.50
網野町	13,346	5,370	4,872	36.51	19.80	7.64	30	18	60.00
丹後町	5,392	2,303	2,194	40.69	22.00	19.03	31	17	54.80
弥栄町	5,089	1,962	1,845	36.25	20.00	25.89	25	16	64.00
久美浜町	9,770	3,762	3,693	37.77	18.30	37.91	71	41	57.70
市合計	56,337	22,662	19,597	34.79	18.70	17.84	210	127	60.50

注)人口・世帯数・高齢者数はH29年4月現在。農家割合は農林業センサス（H22）/国調世帯数（H22）で算出した。

図表23 「紐帯」平均値の比較

統計量 紐帯項目	下京区					京丹後市				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
お祭りや運動会など何かと集まる機会がある	152	1	4	3.16	0.69	126	1	4	2.83	0.75
昔から知っている人が多く住んでいる	152	1	4	3.09	0.76	126	1	4	3.50	0.64
老人クラブなど高齢者の活動が活発である	151	1	4	3.05	0.69	126	1	4	2.32	0.80
助け合い、結い、絆など地域のつながりが残っている	153	1	4	2.99	0.57	125	1	4	2.94	0.64
公民館や集会所などは集まりの場として身近である	149	1	4	2.93	0.89	124	1	4	3.26	0.72
昔ながらの自然や町並みが残されている	151	1	4	2.66	0.74	122	1	4	2.87	0.78
高齢者と接触のない子どもや若者が増えている	149	1	4	2.35	0.74	125	1	4	2.34	0.76
お裾分けなどやり取りの習慣が残っている	150	1	4	2.32	0.87	125	1	4	2.79	0.81
高齢者の孤独が増えている	152	1	4	2.24	0.82	126	1	4	2.24	0.83
お米や野菜など購入しなくてよい	150	1	4	1.23	0.62	125	1	4	2.62	0.87

がりが残っている」の項目で、高くなっている。両地域の平均値の差が統計的に有意かを確かめるために、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行った。結果は、 $t(9) = .95$ 、 $p = .03$ であり、平均値の差に有意差は見られなかった。

2.2 伝統と習慣について

「祭りや年中行事に取り組む習慣」は下京区で平均値は高いものの、他の項目は京丹後市が高くなっている。この伝統と習慣の項目の平均値の差について、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行ったところ、 t

(5) = 1.69、 $p = .15$ であり、平均値の差に有意差は見られなかった

2.3 ソーシャルキャピタルについて

ソーシャルキャピタルの平均値には大きな差はないが、6項目中5項目で京丹後の平均値が高い。「ご近所とは生活面で協力し合っている」のみ下京区が高い。平均値の差が統計的に有意かを確かめるために、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行った。結果は、 $t(5) = 2.20$ 、 $p = .008$ であり、平均値の差に統計的な有意差は見られなかった。

図表24 「伝統と習慣」平均値の比較

記述統計量 伝統と習慣項目	下京区					京丹後市				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
祭りや年中行事に取り組む習慣が残っている	154	2	4	3.35	0.67	118	1	4	3.24	0.76
冠婚葬祭に参加する習慣が残っている	151	1	4	2.68	0.78	118	1	4	3.00	0.85
伝統行事や祭運動会の参加者が多い	150	1	4	2.65	0.73	116	1	4	2.78	0.82
伝統や習慣など引き継がれた暮らしが残っている	146	1	4	2.64	0.70	118	1	4	2.76	0.71
伝統行事が高齢者から若い世代に引き継がれている	149	1	4	2.31	0.66	117	1	4	2.40	0.67
運動会や祭りには外に出た人も帰ってくる	149	1	4	2.14	0.78	117	1	4	2.17	0.79

図表25 「ソーシャルキャピタル」平均値の比較

記述統計量 ソーシャルキャピタル項目	下京区					京丹後市				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
互いに気軽に挨拶を交わしあっている	154	2	4	3.26	0.59	120	2	4	3.37	0.58
地域のほとんどの人は信頼できる	153	1	4	2.99	0.61	120	1	4	3.09	0.64
周辺環境をよくするために一緒に活動をしている	150	1	4	2.88	0.62	119	2	4	3.02	0.65
困っている人がいたら進んで手助けをする	150	1	4	2.81	0.60	119	1	4	2.93	0.65
地域では人を助ければいずれその人から助けをもらえる	150	1	4	2.65	0.62	119	2	4	2.92	0.62
ご近所とは日常的に生活面で協力しあっている	153	1	4	2.63	0.72	117	1	4	2.53	0.69

2.4 高齢者評価について

高齢者評価は全項目で下京区の平均値が高い。この平均値の差について有意水準 5% で両側検定の t

検定を行った。結果は、 $t(4) = 5.04$ $p = .007$ であり、平均値の差は有意であることが明らかにされた。

図表26 高齢者評価平均値の比較

記述統計量 高齢者評価	下京区					京丹後市				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
地域には健康長寿者が多い	150	2	4	3.06	0.53	119	1	4	2.85	0.67
長寿者を尊び大切にする敬老の習慣が残っている	149	2	4	2.91	0.61	117	1	4	2.76	0.64
仕事や趣味など、生きがいを持った高齢者が多い	151	1	4	2.81	0.59	119	1	4	2.67	0.68
地域の高齢者の暮らしは昔より楽になっている	146	1	4	2.71	0.62	118	1	4	2.54	0.78
敬老会行事には若い世代も参加している	149	1	4	2.07	0.64	119	1	4	2.03	0.76

第3部 考察およびまとめ

1 考察

1.1 下京区の学区コミュニティの支え手

70代を中心に60代、80代の男性・女性高齢者が9割以上を占め、地域自治や環境保全に貢献している。現役世代が安心して働ける環境を、彼ら/彼女らが担っているということであり、高齢者評価の高い要因であろう。高齢者は社会のお荷物、支えられる存在だけではないという実態が都市部においても明らかにされた。

1.2 地域満足度と愛着度

下京区は京都市の中心部ながら生まれ育った所、なじみの人がいる所として、地域のコミュニティ満足度は90%、さらに、地域愛着度は94%と高い状況にある。定住性の高さとともに、医療や福祉サービスの充実、買い物、京都駅が近いなどの利便性の良さ、高等教育機関や研究所などの集積、職人産業の集積など、誇りを持ち得る社会環境にあることなどが、満足度、愛着度の高さを支える要因となっている。

1.3 学区の紐帯・年間行事

「祭りや行事など何かと集まる機会」や、「昔から知っている人」が多く、「地域のつながりや助け合う」など、8割以上の人々が紐帯の強い環境であると回答している。老人クラブの活動が活発なこと、年間行事が多いこともその要因である。なお、このような学区の紐帯や年間行事には大きな学区差はなく、

下京区の各学区とも共通して高い状況にあることが明らかにされた。

1.4 伝統と習慣の継承

「祭りなど伝統行事を取り組む習慣」があると9割近くが回答し、「冠婚葬祭の参加」習慣も6割が肯定している。一方で、「次の世代への引継ぎ」が弱いという実態が明らかにされた。

1.5 ソーシャルキャピタル

「互いに挨拶する」は9割を超え、「地域の人は信頼できる」は8割を超え、「一緒に地域活動する」は7割を超えるなど、都市部ながら、信頼、互助、絆のネットワークの強いコミュニティ基盤が形成されている。

1.6 高齢者評価

「地域に健康長寿者が多い」は9割を超え、「敬老の習慣」や「生きがいを持った高齢者が多い」も7割を超えるなど、高齢期・超高齢期を活動的に過ごしている高齢者への評価は高い。地域で評価され、信頼されていることが、コミュニティの支え手として活動できる源となる。そのことが生きがいと健康長寿につながるという、好循環がみられる。

1.7 重要だと思う健康長寿要因

1位に「近隣とのつながり」、2位に「医療・福祉の充実」という結果は示唆的である。都市部においても、健康長寿には経済要因よりもコミュニティのつながりが重要と考えているということであり、それは、第3位以降の回答にも表れている。

1.8 紐帯項目の因子分析

紐帯9項目の因子分析からは、「活動性」、「親密

性]、「疎遠」の3つの因子が抽出され、重回帰分析からは、「活動性」、「親密性」因子は、伝統と習慣や、ソーシャルキャピタルに有意に関連することが明らかにされた。「疎遠」因子はソーシャルキャピタルのみ有意に関連することは、今後のコミュニティ形成に示唆を与えるものとする。

1.9 自由記述

自由記述から、満足度や愛着度の高さとして、生まれ育ったところ、顔の見える関係、利便性や歴史を感じる環境などがあげられ、一方で、高齢者の積極的な自治活動への評価が高い状況にあった。反面、都市部共通の課題として、土地の買い占め、マンション化による自治会への未加入、少子化、高齢化が今後の課題として浮かび上がってきた。しかし、それらの問題解決の取り組みについては、自由記述から多くの積極的な提案も寄せられた。例えば、住民のための身近な情報の入手や、マンション住民の祭り・伝統行事への参加が容易になるような簡単な操作のアプリ開発などの要望は、市内の大学や研究機関の資源およびノウハウ、学生の柔軟な発想力を活用することによって実現の可能性もみえてくる。さらに、単身マンションに住む学生と住民との相互交流や協働によって、新たなコミュニティのありかたも視野に入ってくるだろう。

2 まとめ

本研究は、人生100年時代における健康長寿の支援要因として地域コミュニティ特性に注目し、特に地域のつながりの希薄化による高齢者の社会的孤立が危惧される都市部地域の実態を明らかにすることを目的に、京都市下京区の23（元）学区のコミュニティを対象に、アンケート調査を実施してきた。

結果、明らかにされたのは、下京区の学区コミュニティは都市部という利便性を享受しながら、定住性の高さ、なじみのある関係性、昔からの祭りの継承を基盤に、互助互恵・信頼・絆のソーシャルキャピタル、高齢者への評価の高さなど、長寿地域「京丹後市」と変わらず高齢期を安心して暮らせる信頼

のプラットフォームが形成されていた点である。超高齢者やそれに続く世代の継承関係は存在し高齢層の孤独化傾向はないものの、他方で、マンションの増加、若年層の無関心や参加の不十分さなど、次世代の日常的な参加は今後の課題であることが示された。

今回の結果は、石盛（2009）が2006年に京都市内を対象とした調査において、京都市は大都市でありながら人口流動性の低いことが特徴であることや、地域行事、近所付き合い、困ったときの助け合いにも積極的であることを明らかにしているが、16年経った今回の調査でも、若年層の無関心や参加状況における課題を除けば、その状況は変わらないということが示された。また、前田（2019）は下京区の有隣地区の調査から、強固な元学区の地域自治を貴重な歴史の遺産と評価しているが、下京区全体としても、元学区の伝統の力が町衆の自治力となって、小学校が統廃合されても自治の基盤は今も健在であることを示す結果となった。

下京区の学区コミュニティを、文化のまちづくりの視点から「場」として注目すると、福原（2010）によれば、「場」には地域固有の歴史があり、伝統や習慣に裏打ちされた文化がある。そして、その地域の固有の文化には、それぞれの地域の人々を動かす「場所の意思」というべき力を持っていると論じている。そして、それぞれの地域の固有の歴史や文化に裏打ちされた「場所の意思」を尊重することこそ、その地域の快適環境に貢献する方法であると述べている。

（元）学区はまさに、そこに住む地域の人々を動かす「場所の意思」を示すものであり、アイデンティそのものであるといえよう。また、防災力・自治力に加え、集いの場は日常的に学びあう・育ちあう学習の場となって、学区の紐帯、伝統と習慣、高齢者評価、ソーシャルキャピタルを高めている。これらの項目でも、下京区の各学区ともに大きな差はなく、集落共同体である長寿地域の京丹後市と変わらないという結果は、都市部においても自治のコミュニティの基盤が強固に形成されているところがあるとい

うことである。

広井 (2013, p.56) は、子どもの時期と高齢の時期はいずれも「土着性」ないし「地域とのかかわりが強い、地域密着人口」と呼べる存在と論じている。また、稲葉 (2011) は、60歳代以降に近所付き合いの人数が増えることを明らかにし、社会関係資本の再構築は「近所づきあい」が鍵になることを指摘している。地域生活の主人公となる子どもと高齢者の活動が、地域を活発化する可能性を秘めているこれらの提起は、今後のコミュニティ課題を解決するうえで重要な意味を持つ。加えて、下京区の学区コミュニティ活動の支え手は後期高齢者であり、活動の源には地域の老人クラブの存在があり、地域の環境や祭りを守り子どもたちに引き継ぐ活動も活発であった。高齢者と多世代との交流が若い世代の高齢者観を高め、高齢者が自身の存在意義や生きがいを高めることは長寿地域の研究事例が示している (冨澤, 2020 : 2021)。

人生100年時代を迎え、健康長寿と幸福な老いの実現はすべての世代の共通の課題となっていく。今、その先頭に立つ60代、70代、80代、90代、100歳の生き生きとした存在が、若者にとっても老いる未来の希望となる。地域の伝統文化や祭りを、地域密着層である子どもや高齢者、老人クラブが主体となって、地域住民の総意で支えていく。

下京区の結果は、都市部でのコミュニティの希薄化や社会的孤立という通説に反省を促し、伝統が継承された自治基盤のコミュニティでは、高齢者の潜在能力を生かした生涯現役の役割の場があり、サクセスフルエイジングや健康長寿の実現に寄与していることを実証した。同時に、この調査結果は、マンションの増加や、若者層における伝統文化に対する無関心や地域への参加の不十分さと併存している。この困難な状況を改善するには、後期高齢層が直近の世代だけでなく若い世代にも関心を寄せ、多世代が交流できるつながりの場の構築が重要と考えられる。人生100年時代の主人公となる若年層が人生の可能性を拓けると確信できる社会環境を生み出す必要

があることを示唆している。

今後の課題としては、大学のまち京都の資源である学生や大学・研究機関と住民・高齢者が連携し、地域住民を主人公にした健康長寿のコミュニティづくりには、どのような施策が必要となるかを研究する必要がある。

謝辞

本研究は、下京区長さんをはじめ地域力推進室の職員の方々、ならびに学区自治連合会長の方々にご協力賜わり実施することができました。ここに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 人生100年時代は『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』の本のなかで、リンダ・グラットンとアンドリュー・スコットが提唱した言葉である。
- 2) 政府は2017年9月8日に「人生100年時代構想推進室」の看板を掲げている。
- 3) 内閣府「人生100年時代構想会議」(平成29年11月) https://www.city.obihiro.hokkaido.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/335/h29_4_sannkousiryou6-1.pdf
- 4) 例えば、「梅選学区 (ばいけいがつく)」は平安京の昔には梅の並木があったことに由来し、大内学区は、応仁の乱で西軍に属した周防の大名・大内政弘が周辺一帯を占拠したことから名付けられるなど、古の都から引き継がれた歴史や伝統を伺わせる。また、「有隣学区」は、「論語」里仁編の「徳は弧ならず、必ず隣有り (徳不孤必有隣) から、「開智学区」は、浄住子「開智生福 不墮悪趣」の「知識を開拓する」から名付けられる。また、「修徳」「成徳」などの学区名には地域の伝統的教育観を感じることができる。
- 5) 下京区データ <https://www.city.kyoto.lg.jp/shimogyo/page/0000011965.html>。
- 6) 調査項目
問1 : 基本属性 (所属学区・年代、性別、自治会活動との関わり・役員歴、コミュニティ環境満足度、地域愛着度、医療福祉サービスの利用環境)。
問2 : 学区の紐帯 (10項目、4件法)。問3 : 学区

の年間行事（例示し複数回答可）。問4：伝統と習慣（5項目，4件法）。問5：ソーシャルキャピタル（6項目，4件法）。問6：高齢者評価（5項目，4件法）。問7：重要だと思う健康長寿要因（例示し複数回答可）。自由記述（問8：地域の活動事例，問9：地域課題，問10：健康長寿を実現するための地域条件など）。

- 7) 学区別では回答が0の学区が1つ，回答者が1人の学区が1つあり，この2つの学区について詳細な分析は行っていない。

参考文献

- 石田光規 (2022) 「現代社会における孤立問題：地域社会は再生するか」『政策オピニオン』No.250。
- 石盛真徳 (2009) 「大都市住民のコミュニティ意識とまちづくり活動への参加：京都市における調査から」『コミュニティ心理学研究』Vol.13, No.1。
- 稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』中公新書。
- 京都市 (1972) 『京都の歴史5』学芸書林。
- 京都市教育委員会京都市学校歴史博物館（編）(2016) 『学びやタイムスリップ—近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター。
- 権藤恭之 (2008) 「生物学的加齢と心理的加齢」権藤恭之編『高齢者心理学』朝倉書店。
- 総務省 (2022) 「地域コミュにティに関する研究会報告」https://www.soumu.go.jp/main_content/000819371.pdf (2023.1.15閲覧)。
- 田中志敬 (2010) 「マンション増加地域におけるコミュニティ運営：京都市都心部の町内・元学区を事例として」『コミュニティ政策』No.8。
- 田中志敬 (2016) 「都心住民の近所付き合いと住民自治：京都コミュニティ調査を事例にして」『社会科学』45巻第4号。
- 富澤公子, Masami Takahashi (2014) 「健康長寿におけるコミュニティの役割：奄美群島の幸福な老い」『2012年度公益財団法人ユニバーサル研究助成：豊かな高齢者社会の探求』No.22。
- 富澤公子, Masami Takahashi (2016) 「健康長寿と幸福な老いの環境要因：長寿地域「京丹後市」を事例とした実証研究」『2014年度助成ジェロントロジー研究報告』No.12。
- 富澤公子 (2018) 「長寿地域における長寿の地域要因と支援要因の分析：京丹後市を事例として」『大阪ガスグループ福祉財団調査・研究報告集』No.31。
- 富澤公子 (2019) 「奄美群島における長寿の地域要因と支援要因の分析」『国際文化政策』No.10。
- 富澤公子 (2020) 『長生きがしあわせな島（奄美）DVD付』かもがわ出版。
- 富澤公子 (2021) 『幸福な老いを生きる：長寿と生涯発達を支える奄美の地域力』水曜社。
- 内閣府 (2011) 『平成23年版高齢社会白書』https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf_index.html
- 内閣府 (2022) 『令和4年版高齢社会白書』https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/04pdf_index.html
- 槌野公宏, 石井儀光, 米野史健 (2014) 「高齢者の安定した地域居住に関する生活行動実態調査報告」独立行政法人建築研究所『建築研究資料』No.158 <https://www.kenken.go.jp/japanese/contents/publications/data/158/index.html> (2023.1.15閲覧)
- 広井良典 (2014) 『人口減少社会という希望：コミュニティ経済の生成と地域倫理』朝日新聞出版。
- 福原義春 (2010) 「銀座の街と資生堂」『国際文化政策』No.3。
- 法務省 (2018) 「平成30年版 犯罪白書 第7編 / 第1章」https://www.soumu.go.jp/main_content/000217313.pdf (2022.10.15閲覧)。
- みずほリサーチ & テクノロジー (2021) 『社会的孤立の実態・要因に関する調査分析等研究事業報告書』（厚生労働省令和2年度社会福祉推進事業）(PDF/6,200KB) (2023.1.8閲覧)
- 前田昌弘 (2019) 「『元学区』のまちづくりに見る地域施設及び地域自治の未来：京都市下京区における実践を通じて」『2019年度日本建築学会大会（北陸）』<https://kdb.iimc.kyoto-u.ac.jp/profile/ja.892dad5fb>(2023.1.15 (閲覧))
- リンダ・グラットン, アンドリュー・スコット (2016) 池村千秋訳『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』東洋経済新報社。
- 湯浅俊郎 (2004) 「インナーシティにおける高齢者の地域とのかかわりについて：京都市下京区Y学区を事例にして」『社会科学』73号。

参考 URL

京都市.「京都市内における各学区の自治会組織の構成例 資料5」[https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000049/49970/jitikaikousei\(siryou5\).pdf](https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000049/49970/jitikaikousei(siryou5).pdf) (2022.7.12閲覧)

京都市下京区.「下京地域情報サイト」<https://shimogyo.city.kyoto.lg.jp/boards> (2022.7.12閲覧)。

健康長寿ネット.「高齢者の地域社会の関わり」<https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/tyojyu-shakai/koreisha-shakaisankakatsudo.html> (2022.7.12閲覧)

全国老人クラブ連合会「老人クラブとは」<http://www.zenrouren.com/about/act.html> (2022.7.12閲覧)

総務省 (2015)「都市圏のコミュニティの現状と課題」出典：第31次地方制度調査会第17回専門小委員会 (平成27年5月27日) https://www.soumu.go.jp/main_content/000456883.pdf (2022.12.1閲覧)。

内閣府「人生100年時代構想会議」https://www.city.obihiro.hokkaido.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/335/h29_4_sannkou_siryou6-1.pdf (2023.1.20閲覧)。

Challenges for Communities to Support Healthy Longevity
in the Era of 100-Year Life-span Expectancy:
Through Comparison between an Urban Area (Shimogyo-ku, Kyoto-shi)
and a Rural Area (Kyotango-shi) Concerning the Actual Interchange
Situation within the Neighborhood of Elderly Persons

TOMIZAWA Kimikoⁱ, NAKANISHI Norikoⁱⁱ

Abstract : This research examined the possibility of achieving successful aging from the perspective of local communities as the era of 100-year life-span approaches. Particularly, the actual situation of elderly people's interaction with their neighbors was analyzed through a comparison with a rural area (Kyotango City) (Tomizawa, 2018). As a result, it was found that the school district autonomy in Shimogyo-ku involves the late elderly in their 70s and 80s at the core of activities, and there are many “opportunities to gather at festivals and other events” with “people they have known for a long time” as well as active involvement in “senior citizen club activities.” In particular, the most important factor for healthy longevity was “ties with neighbors.” In comparison with Kyotango City, the situation was similarly high in terms of ties, traditions and customs, social capital, and evaluation of the elderly. Applying t-test of group differences, only “Elderly Evaluation” was significantly higher in Shimogyo-ku, at the 5% level. Reflecting on the commonly-held belief that urban communities are becoming weaker, this result suggests that communities with strong self-governing foundations provide opportunities for the elderly to be active, and that these activities contribute to the realization of healthy longevity. As a future issue, it is necessary to conduct research aimed at solving problems while utilizing the resources of universities and research institutes, such as the development of a simple and easy information application to encourage the participation of condominium residents and younger generations.

Keywords : Healthy Longevity, Successful Aging, Local Community Ties, Tradition, Festivals, Senior Citizen Club

i Visiting Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University

ii Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

